

★作詩者

作詩者はレジナルド・ヒーバー (Reginald Heber、1783-1826) です。詩は、預言者イザヤが見た聖なる神の幻(イザヤ 6 章)と、使徒ヨハネに与えられた啓示(黙示録 4 章等)をパラフレーズしたもので、彼による讃美歌の中で最も有名で広く用いられています。本来は三位一体主日のための特別な賛美歌ですが、朝の讃美歌として歌われることもあります。

彼の略歴については、讃美の力集会第 37 回讃美歌 118 番「くしき星よ、やみの夜に」をご参照下さい。

「 <https://www.jesugivesyourest.com/message/detail.php?id=324> 」

★作曲者

作曲者はジョン・ダイクス (John B. Dykes、1823 年-1876 年)で、イギリスにおける C.ウェスレーやウォッツに並ぶ作曲家で、イギリス風の優雅な讃美歌曲は、世界中の集会で歌われています。

私たちの讃美歌 (1954 年版) でも 18 曲採用されており (65, 66, 125, 127, 131, 134, 178, 184, 221, 238, 264, 287, 288, 311, 350, 375, 407, 420)、その大部分は広く親しまれています。

今回取り上げる「聖なるせいなる」は彼の作曲中最高位にあり、ヒーバーの堂々たる歌詞と相俟って、イギリス・プロテスタントの会衆歌中、まことに比類なき荘厳なる曲です。

また、曲名には三位一体の教理を定義し確認した第一ニカイア公会議 (325 年、キリスト教史における最初の全教会規模の会議) にちなんで Nicaea(ニケア)の名が冠らせています。

ダイクスは 1823 年、イギリスのハルに生まれました。幼いときから楽才を現わし、1849 年にダーハム聖堂の聖職ならびに聖歌隊長を兼ねた名誉ある地位に就くと、精力的に讃美歌曲の作曲を始めました。才能と地位に恵まれた彼でしたが、作曲の都度忌憚なき批評を受け修正・改作に努めたそうです。

彼にとって讃美歌は、大衆の魂を神に引き合わせるためのものであり、個人的な思想や感情表現の具でもなく、ましてや作曲の技巧を誇示することや演奏効果を狙うことを慎しみ、こう言ったと伝わります。

「神は、わたくしをして、かくのごとき卑しむべき欲望によって、みずからを押出そうなどと試みることを、許し拾わぬのである。わたくしは実に熱心に、こうした動機で仕事をするのが、決してないように祈った」。

参考文献：『讃美歌作者の面影』、津川主一、ヨルダン社、1970 年 7 月 10 日 3 版 P327ff